

S M小説

SAMPLE サンプル 試読

亜由美

SAMPLE サンプル 試読

第三部

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



SAMPLE サンプル 試読



SAMPLE サンプル 試読

SAMPLE サンプル 試読

本作品はすべてフィクションであり、
実在する人物・地名・団体とは一切関
係ありません。また、特定の個人、団
体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷
する意図はありません。

あんぷらぐど

SM雑誌に「仲ゆうじ」名でSM小説を執筆して
作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、
編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」
「あんぷらぐど」名でSM小説を執筆。独自の自
虐的SM、一人称による告白形式の作品、伝奇S
M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

これまでのあらすじ	5
便所犬	6
メス豚矯正所 輪姦十番勝負	25
プール対決	58
テニス対決	77
バスケ対決 (合宿 2 日目)	96
剣道対決	125
ラグビー対決	143
バレーボール対決 (合宿 3 日目)	155
柔道対決	167
野球対決	189
トライアスロン対決 (合宿 4 日目)	203

卓球対決	233
サッカー対決	250
拷問の日	264
登美子の打擲拷問	297
佐智子の釘打ち拷問	330
安里咲の灼熱拷問	358
映奈の針刺し拷問	380
拷問許可（拷問実験 2 日目）	398
安里咲の決断	445
最終拷問	492
二つのエンディング	526
第三のエンディング	544
奥付	567

これまでのあらすじ

亜由美は念願の大学へ入学したが、そこで兄の親友だった剛介と再会する。剛介は亜由美の特殊な性的願望をすべて理解し、開発しようとしていたときに引っ越していったのだった。

亜由美は剛介に処女を奪われ、抑えていた自身の被虐的な欲望に目覚めていく。大勢の男たちに身を任せ、ゲーム作りと称して犯されていく。

ゲーム作りはいよいよ終盤を迎え、ゴールデンウィークを利用した輪姦合宿が始まった……。

便所犬

警備員の村木が運転する二十九人乗りの小型バス

ゴールデンウィークがはじまったのだ。道路が混雑するからと、商店街組合の連中に輪姦されたあと、ほとんど休む間もなく、亜由美はこのバスに乗せられたのである。

夜中の道を走る。

くたくたの亜由美は、うつらうつらしていた。裸のまま毛布だけをかけていられていた。

一番後ろの席に四人座ることができ、その奥に亜由美はいた。剛介やゲ

一研の連中に加えて、カラオケ研究会のメンバーの顔も見える。

補助席を使わないと二十二席だ。そこがほぼ満席になっていた。

亜由美はなにも聞いていなかった。商店街のパレード、着ぐるみでのゲーム、そして夜店で行われた淫らな露出。

最後には打ち上げと称して、商店街組合の理事たちのために、緊縛ショーを見せ、体を開いて女体盛りならぬ、人間鍋。コチュジャンを入れられ、そこに手長タコを入れられ、敏感な器官を器として使われた上に、奉仕、そして輪姦の地獄を味わってきたのだ。

いまさら、なにも考えることができ

るのだろうか。

「どこへ行くと思う？」

「どこですか？」

「合宿だよ。さすがに大学の施設はもう予約でいっぱいだからムリだったけど、村木さんがいいところを見つけてくれたんだ。楽しみにしてくれよ」

女友だちたちと、湖畔の大学寮へ行く、という夢。

それとはまったく違う世界。合宿といても、亜由美は撮影の対象であり、嗜虐の対象でしかない。

「ここで少し休むぞ」

運転席の村木が野太い声を出す。

高速道路を降りて、道の駅に入って

いく。店舗は夜中なのでシャッターが降りていたが、自販機が並んでおり、駐車場には多くの車があった。トイレを使う人影が見える。

「ほら。おまえの好きな野外だぜ」

剛介ではなく、ゲー研の男に馴れ馴れしく言われて、亜由美はびっくりする。

名も知らない男が、昆虫じみた顔で、亜由美になんでも命じることができ、優越感に浸っている。

首輪に鎖がつけられ、カメラが用意される。

亜由美の毛布が剥ぎ取られる。

エンジンが止まり、ドアが開く。春

にしては、山間部が近いのだろう、冷たい風が入ってきた。

亜由美は身震いする。鳥肌が立っていた。

なんとか立ち上がって、震えながらバスを降りる。後ろからくるカメラだけではなく、すでに降りて待ち構えているカメラもあった。

照明を使っていないが、撮影できるらしい。

「ほら、四つん這いだろ」

誰かが言う。

「はい」

亜由美はアスファルトに手をついた。

お尻を高くあげる。

鎖を引かれて、男のあとをついていく。

眠くてだるい。

わずかな救いは、昨日までのような全身を包む不快感が減少していたことだ。生理の峠は越えたらしい。

「なんだ、あれ」

「AVの撮影かな」

「すげえ、裸だぜ」

「まだ若いんじゃないか。大人なのかな」

「そう見えるだけだよ。さんざん、男とやってるに決まってるさ」

「そりゃそうだな。あんなかっこうで

歩くなんて、フツーじゃないぜ」

ヤジウマが集まっていた。

亜由美は、そんな状況をよくわかっていない。苦しい姿勢で歩くことに集中していた。

「小便しろよ」

街灯の下。そこは昼のように明るく、近くにゴミ箱や自販機が並んでいるので、ほかの客たちもうろうろしている。

羞恥心がなくなったのならともかく、恥ずかしくて逃げ出したいほどなのだが、夢中になっているフリをする。わずかな経験ながらも、そうすることで、少しは耐えられることを学んでい

た。

「おお、なんか書いてある」

「淫乱メス豚、18歳 亜由美、撮影中」
の文字を読み上げる。

「『遠慮なく騎ってください』だっ
てさ」

「おもしろそー」

若い男の音がする。人垣が倍ぐら
いに膨らむ。

「片足あげてやってみろ」

メス犬ならしゃがんでするもの
だが、彼らはオス犬のようにする
ことを命じていた。

片足をあげてしたことはなく、
バランスも難しければ、おしっこ
を出すの

もコツが必要だった。

男たちに恥ずかしい姿をじっくりと観察されながら、体を震わせて、膀胱に力を入れる。

「くうううう」

やっとちょろっと出たが、そうなる
とあとは、普通におしっこが出た。

商店会の輪姦後に大量の水分を取っていた。それが全部、出ているようだった。

「トイレでまわそうぜ！」

「いいね！」

聞き慣れない声がしていた。

鎖が引かれ、男子トイレに連れ込まれる。

見回すと、いつもの顔ではない。見知らぬ男たちが五人いた。知っている顔はカメラマン二人だけだ。

ゲー研の連中は、駐車場にいた若者たちに亜由美を引き渡したのだ。

「ほらほら、メス犬。舐めてくれよ」

若者がズボンを下げる。

はじめて会った男のものを、無条件で口にしろという。

心が「できない」と叫ぶ。

手が動き、口が開く。

「ムリ、絶対、ムリだから……」

亜由美はそれを口に含んだ。

ああ、やっぱりこうしてしまうんだわ。これがメス豚亜由美なんだわ。

心より先に、体が反応するようになっていた。

もう何本目かなど思い出せない。

口で含む瞬間に、体が強い拒絶反応をみせるのは相変わらずだった。

反射的に顔を背けたくなる。吐き出したくなる。そんな自分をむりやり、相手に向けて口を開き、飲み込むのである。

「お、けっこううまいじゃん」

「ホントかよ」

次々と五人の若者は亜由美の口を試す。

「ケツ、あげろよ」

亜由美が尻をあげると、唾液で濡れ

た男根が、スポンジタンポンの入っている膣に侵入してきた。

「うひいい」

さんざんもてあそばれ続けて来た器官は、その残像が色濃く残っている。わずかな刺激でも、粘膜が引き剥がされるような痛み。

ところが、その痛みに亜由美の脳髓が反応し、愛液をダラリと垂れ流すのである。

ぐいぐいとピストンがはじまる。

その間に、口内に男が射精した。それを飲み込んでいる間に、後ろの男も「うっ」と言って果てた。

「すげえ締めるぜ」

「マジかよ」

次の男が入ってきた。

「お、いいねえ」

肉棒を突き、さまざまな角度を試しながら亜由美の肉体を味わう。

そして、中に出していく。

コンドームを使っていない。亜由美は違和感を抱いたが、そのことを深く考えるゆとりはなかった。

剛介たちが次のステージに進んでいることを、亜由美はまだ知らないのだ。

「もう、亜由美の体を気遣う必要はない」

剛介はバスの中で会員たちと話し

合っていた。

「徹底的にやる。どうだ？」

反対する者はもういなかった。それぐらい、亜由美の体は彼らにとって、まったく違う存在になっていた。女ではある。性別としては。

それでいて、「彼女」ではない。恋人や恋人の代償になる存在ではない。

バーチャルな世界と現実の世界の両方に棲む、特別な存在。

汚れることだけのために存在しているアイコンなのだ。

自分たちの手で汚せば汚すほど、輝く不思議な物体……。

会員たちは、合宿でとことん亜由美

を汚す計画を立てていた。

当初は大勢を占めていたレクリエーション的な計画を、剛介がすべて否定してしまったからだ。

「そんな、生ぬるい映像に誰が納得するんだ。亜由美の本当の価値はそこじゃない」

その言葉に会員たちは、自分たちが言い出せずにいたことを、剛介が代弁しているのだと感じた。

「これからの五日間で、亜由美を潰してしまっただっていいんだ。そのぐらいの勢いでやらなくちゃダメだ」

その会話を亜由美は眠りこけていたので、ほとんど聞いていなかったの

である。

五人の見知らぬ若者たちに肉体を捧げたあと、カメラに汚れた性器をクローズアップで撮影してもらおう。

「亜由美をもっと犯して。亜由美はみなさんの便所です」

亜由美の苦しげな、それでいて男をその気にさせずにはいられない不思議な笑みが浮かぶ。

「よーし、便所の亜由美だぜ」

小便器の横に座らされ、会員たちがつきつきと亜由美に小便を浴びせていく。

「ほら、飲めよ」

口を自ら開き、放射状に落下する小

水を受け止める。かなりの量が胃まで入っていった。

亜由美は男たちの小便を浴びながら、精液があふれ出ている性器を指でかき回すのだった。

トイレの外にある水道の水を頭から浴びせられた。

濡れた体に冷たい夜風が当たる。寒くて凍えそうだ。

「立てよ」

亜由美は立ち上がる。

会員たちが並んで、バスまで道を作っている。みな手に短い棒を持っていた。

「バスへ戻れ。急いで」

走るしかない。列の中に飛び込む。
バシッ、バシッと尻や背中に棒が振り下ろされる。

「あう、いたい、ひい」

悲鳴をあげながら、なんとかバスに辿り着いた。

「おまえにはもう席はないんだよ」

剛介が毛布を床に敷いていた。

濡れた体をくるみ、横になる。

ゴーゴーと騒音を耳元に聞きながら、激しい振動に耐えて、目的地までじっとそこにいた。

みんなは仮眠をしていたが、亜由美はろくに眠れなかった。

なにかが変わった、ということだけ

がはっきりわかったただけだった。

会員たちとの間にうまれた特別な関係。それは家族を裏切り、孤独になった亜由美にとっては唯一の救いだった。

犯されて、苦痛を感じているとき、すべてを忘れることができた。

しかし、剛介や会員たちは、あえて、そのつながりも断ち切ろうとしているように見えた。

兄弟に見捨てられ、この上、剛介や会員にも捨てられたら……。

肉体的な苦痛以上に、つらく感じられた。

メス豚矯正所 輪姦十番勝負

夜が明ける前に、谷間にある合宿所に到着した。

そこは、テニスコート、グラウンド、プールの揃った保養施設だった。まだ暗くて全貌は見えない。ヘッドライトに照らされた案内板に、広大な敷地の全貌が見てとれた。

ゲー研の数人が先に別のレンタカーで来ていて、電気を通し、食糧なども運び込んでいた。

「とりあえず、寝よう。話は朝だ」

亜由美はお湯の出るシャワーを使うことが許された。ボディシャンプー

も使うことができた。

二段ベッドが二組ある部屋を一人で使うように言われた。

「どうだ、その柔らかな布団で眠っていいんだよ」

剛介がそう告げた。

撮影がはじまってから一度もないような優しい扱い。

それも不吉な前兆にしか思えないが、くたくただった亜由美は深い眠りに入った。

夢を見ていた記憶はなかった。

ただ暖かでおだやかな気持ちに満たされていた。柔らかな唇の感触。

薄く目をあけると、目の前に剛介が

いた。

「ごめん、目が覚めちゃった？」

もしそれが幻想だったら、消えないうちにもっと感じておきたい。

亜由美は手を伸ばした。剛介の硬い髪に触れた。

ホンモノだ。

耳。顎。優しい笑顔。

あの頃のような。

亜由美のことを「お人形」のように扱い、全裸にして、いろいろないたずらをした……。亜由美に眠る被虐性を、薄紙を剥ぐように、少しずつ剛介は明らかにしていった。

二人だけの秘密の儀式。

あの頃の純粹な気持ちは、いまもまだ残っているのだと気づかされた。

亜由美から求めて、もう一度キスをした。

深い深いキス。舌がゆっくりと重なり、言葉にならない意思を伝え合った。長く続いた。

自然に二人の唇が離れていくが、離れがたい気持ちが乗り移ったかのように、上唇がくっついてしばらく離れなかった。

「相変わらず、かわいいね」

つられて、亜由美も笑った。

久しぶりの本心からの笑顔だった。このまま剛介がベッドに入って、抱い

てくれるかもしれない……。

「あんまり時間がないから、起きてくれるとうれしいな」

剛介はゆっくりと布団をはがした。

亜由美は黙って従った。夢の続きがあるのだろうか？

「おいで」

手をつないでくれた。

剛介が連れていったのは大きな浴室だった。

誰もいないが、カランが左右に五個。それぞれにシャワーがついている、銭湯のような風呂だった。

そこに湯がたっぷり入っていた。

「残念ながら温泉じゃない。ここは何

十年も前に開発された保養所なんだ。その会社が倒産してから、いろんな人の手に渡って、今年の正月までリゾート施設として営業していたんだよ」

剛介も裸になった。

そして湯船に二人でつかった。

夜が明けたばかりなのだろう。天窓に水滴がいっぱい付着して、その向こうはぼんやりと白くなっている。

「だけど古いから立て直さないといけない。夏までには取り壊しになるんだ。村木さんの知り合いが管理しているので、使わせてもらうことができたんだよ」

亜由美は黙って聞いていた。

なんだか幸せな気分がしていた。

本当に二人だけで旅行に来ていたら、どれだけ楽しかっただろう。

面倒なことはいらぬ。亜由美は剛介になら、もっと恥ずかしいことでも耐えられるし、苦痛でもなんでも悦びになっただろう。

ほかの人たちや、面倒な機材などいらぬのに……。

「先にゲー研の連中が乗り込んで準備してくれたんだ。風呂はここだけなんだけど、ずっと湧かしておくからいつでも入ることができる」

剛介が立ち上がり、亜由美を引っ張りあげる。

「その文字を全部、消しちゃおう」

「はい」

クレンジングクリームを大量に使って、マーカーで書かれた文字、まだ乳房や臀部に残っているサルの色などをきれいに落とすのだ。

それを剛介が自らやってくれる。

すばらしく気持ちがいい。

スポンジは傷口を押し広げ、クレンジングクリームや石鹼が染みてくる。それでも、亜由美はうれしかった。

「私たち、結婚したみたい」

思わず、亜由美はそう言っていた。

剛介が驚いた顔をした。ピストルで撃たれたように体が固まっていた。

怒られるだろうか。殴られるのだろうか。亜由美は脅えた。

しかし剛介は無言でスポンジを持つ手を動かした。

「結婚なんてつまらないよ。ぼくたちの関係はそれ以上にすばらしいものだから」

「ホント？ ホントにそう思う？」

「二人だけなんだし。カメラもないし。ウソじゃないし」

抱きつきたい、と亜由美は思う。

しかし、剛介は押さえつけるようにし、ゴシゴシと亜由美の体から文字を消していった。それを払いのけることはできなかった。

「今日は亜由美を驚かせることばかりだと思うよ」

「なにをやるんですか？」

「このあと、食堂に行けばわかる。そこからスタートだからね。よし、きれいになった。鏡を見てごらん。ほかにも洗いたいだろう？ 毛も剃っておいてね。呼びに来るまで、ここでゆっくり温まって、体を洗っておいて。そうだな、十分ぐらいしたら、来るからさ」

浴室の時計を湯気越しに見上げる。六時二十分。

剛介が先に出ていく。その背中を亜由美はじっと見ていた。

剛介はわかっている。私のことをすっかり、わかっている。すべてを信じることにした。

亜由美は鏡に自分の体を映した。文字のない首輪だけの体。

いろいろなことがあったが、ごく普通の人間の女性に見える。かなりほっそりとして、腰がくびれ、肋骨が少し浮き上がっている。

痩せたらしい。

細すぎるかもしれない。

道の駅で出会った若者たちが、大人の女じゃないのではないかと勘違いしたのもわかる。

それでも、乳房と乳首は別物のよう

に突きだしている。いつからそんなに女らしくなったのか、亜由美にも不思議だった。

お尻もそうだ。一回り大きくなったようだ。

「すごく、いやらしい」

自分で見てもそう思う。

そういうことだけをしてきたから生まれた、崩れた美しさだ。

心はまだ十代で、体だけ四十近い女性になったような感じがする。

それでいて、あまりにも無防備にも見えた。

これまでは体の文字が自分を守ってくれていた。その飾りを失って、

弱々しく見える。

陰毛と脇の毛をカミソリで剃る。襟足も剃る。

髪も体も洗う。シャワーを浴びる。湯船に入る。

これだけの施設を使わせてもらうのにどれぐらいの費用がかかるのだろうか。

あの警備員の村木の知り合いだからといって、電気代や燃料代もバカにならないはずだ。

ということは、これだけの投資に見合う結果を、剛介たちは求めるだろう。

それは、さらに過酷な要求に違いない。

「おーい、行くよ」

外で剛介の声がした。

「はい」

亜由美は湯船を出た。夫婦みたいだとまた思う。

脱衣室へ行くと、服を着た剛介が太い鎖を持っていた。

「体を拭いて」

目の粗いコットンのタオルを渡された。全身を拭く。髪は完全には乾かないが、それでいい、という。

鎖を首輪にかけた。ガチャンと音がした。その重さに首が前に傾く。

「手」

手を出す。鉄の枷。首輪からの鎖を

そこに通す。ジャラジャラと冷たい音がこだまする。

剛介は足首にも鉄の枷をつけた。そこに鎖を通す。その先端に、丸い鉄球が取り付けられる。

「歩いてみて」

足を前に出す。重い。ドラム缶を叩くようなものすごい音。それが耳の中をいっぱいにしてしまう。

「よし。じゃあ、いくよ。ここからは、ノンストップだからね」

「はい」

答えたものの、涙がにじんでくるのを止められなかった。

剛介がそれを見つけた。

指で優しく拭う。

「大丈夫。亜由美は最高にかわいいよ」

軽く口づけをしてくれた。

それはベッドでのキスとはもう違うものだった。

魔法の時間は終わったのだ。

剛介は恋人でも、夫でもない。

なにがあっても、なにをされても生き抜いてみせる。亜由美はそう自分に言い聞かせて、足を前に出した。

壊れたロボットのような音を立てて、コンクリートの廊下を歩き、食堂と書かれた部屋に行く。

広い学食のような部屋で、テーブル

とイスが整然と並んでいた。

全員がいた。カメラが回っていた。

食堂の厨房の上に、看板が掲げられている。

「メス豚矯正所 輪姦十番勝負」とある。

「さあ、いよいよメス豚の登場です。名前を名乗ってもらいましょうか！」

会員の中で声のいい者が司会役になっていた。全員が亜由美を見ている。

「亜由美です」

「どうしてここへ来たんですか？」

もう始まっているのだ、と亜由美は思う。だが、なにが始まったのか、よくわからない。

「どうして来たのかな？」

「あ、亜由美はメス豚だからです」

「メス豚って？」

カメラが接近してきて、洗い立ての輝く裸体を舐めるように撮影していく。

「どんなメス豚なのかな？ 言ってみて！」

「数え切れない男としました！」

「なにをしたんでしょうか！」

「セックス。アナルセックス。オーラルセックス。おしっこを飲んだり、浣腸してもらったり、何人もと同時にしたり……」

「どうしてそんなことをしたんです

か？」

亜由美は絶句してしまふ。どうして？ 理由などあるだろうか。

「したくて、したくて、しょうがないからです」

「なるほど、聞きしに勝るメス豚ぶりです。しかーし、このメス豚矯正所に来たからには、その根性を徹底的に叩き直すことになりますよー。いいですか。泣いてもわめいても、終わるまで帰しません。覚悟はいいですか？」

「はい」

「今回は、十の勝負をしてもらいます。負けたら毎回、参加者による輪姦ということになります。もしホンモノのメ

ス豚なら、輪姦が三度の飯より大好物なわけですから、きっとわざと負けるでしょうねー。でも、もしかしたら、メス豚というのは仮の姿。本当はごくフツウの女性かもしれません。つまり女性として矯正できるかもしれないのです。そのチャンスを賭けた戦いとなります」

亜由美にはその言葉がよく理解できない。

「よし。まず朝ごはんを食べてくださいーい」

別の男がやってきて、床にご飯と汁、肉片などを落とし、長靴で踏みつけた。

「うわー、ぐちゃぐちゃだー。でも、

メス豚なら喜んで食べるんでしょ
うねー」

「はい」

亜由美は重い鎖に引っ張られるように屈み込むと、這いつくばってそれを口に入れた。

「はふ、はふ」

荒い息をしながら、ゴミのような食べ物
を口に入れ、飲み込んだ。そしてすっかり
きれいになるまで、床を舐めた。

「うわー。まさしくメス豚ですね。これ
から全部で十の試練があります。亜由美
がそれをすべてこなせば、結果し
だいで三つの可能性をつかむことが

できるんです」

それは撮影用の言葉であると同時に、亜由美に教えるためのものでもあった。リハーサルなし、予備知識なしで、ひたすら生身のままぶっつけ本番をさせる。それが剛介たちの選んだ撮影方法だった。

「第一の結果。それは十番すべてに亜由美が勝利したとき。亜由美は実はメス豚ではなかったのです。日常社会に戻って女子大生として楽しいキャンパスライフを送ってください。恋愛も自由です！」

それは撮影のシナリオの話なのか。それとも本当のことなのか、亜由美に

は区別がつかない。

十の勝負をして、勝てば自由ということなのか。

その自由とはなんだろう。

「第二の結果。勝ったり負けたりして、何度か輪姦されちゃった場合。それはメス豚であり続けることを意味しています。やっぱりただのメス豚だった！ 矯正の可能性ゼロです。ということで、これから使い物になる間は、男たちのために肉体を与え続けることになりまーす」

飼い殺し、という言葉が浮かぶ。性的な魅力、商品価値がなくなるまで、彼らのオモチャとして使われ続ける

ということか。

「第三の結果。全敗した場合です。なにも努力せず、勝つ気力もなく、メス豚であることを望んだ場合。十番勝負の間に、延べ二百人以上の男に輪姦されてしまうのです」

その数字を亜由美は実感が持てないまま、耳にしていた。二百人に連続で犯される……。

そんなことが可能なのだろうか。

「そうなってしまったら、残念ながらもはやメス豚以下ってことになっちゃいます。汚らわしい献体として、拷問実験を受けることになります」

あっと声に出そうになる。

最後の結果を剛介たちが望んでいることは明らかだった。

ゲームのシナリオは最後に拷問のパートがあった。これは、そこへつなげるために作られているのだ。

男たちに奉仕しているだけの亜由美を、いきなり拷問にかけたのでは、ストーリーとしてのつながりが悪い。拷問にかけるためには、なにか理由があるべきだ。

そのために勝負をし、それに負けたらメス豚以下という烙印を押す。そして拷問にかける……。

ということは、剛介たちは、どの勝負も圧倒的に亜由美が不利なように

作っているに違いなかった。

努力しようがしなからうが、全敗させて拷問にかけることは決まっているのである。

だが、全勝はムリだとしても、何度かは逃れることができるのではないか。

拷問を受けるより、メス豚で飼い殺しにされるほうがマシなような気がした。

「いいですか、亜由美。全力で戦わなければ第三の結果になっちゃいますよー。覚悟はできているな？」

「はい」

「よし。でははじめましょう。最初は

プールでの対決。メス豚をプールに連れて行っちゃってくださーい」

鞭を手にした男たちが現れ、床をビシッ、ビシッと叩く。

それに追われるように亜由美は食堂を出る。

金属の枷と錘を引きずっているのだから、すでに体力が奪われている。それも計算のうちなのだろう。

外に出ると、山風が吹き下ろしてきて、いっきに亜由美から体温を奪っていった。唇が紫色になる。

早朝のプール。四月の終わりとはいえ、山の中だ。

それも計算のうちだ。連日の辱めで

体力的には、常に限界の域に入ったままになっている。回復しないままに次々と凌辱され続けてきたのだ。

蓄積された疲労。その上に、気温差をはじめとする自然の厳しさが待ち受けていた。

剛介が風呂に入れてくれたのは、せめてもの情けだろうか。

ガタガタ震えながら、砂利道を裸足で歩かされる。まるで古代の囚人だ。

石が足に食い込む。鉄球がガンガンと石を砕く。立ち止まると、後ろから鞭が背中に……。

「ひー」

泣き出したくなる。

アスファルトの道を横切り、スロープを降りていくと、ようやくプールだった。

細い川がすぐ横を流れている。

川の水がそのままプールになっているようだ。山からの水だ。どれほど冷たいか、想像もつかない。

プールサイドには海パンを履いた体格のいい男が十一人立っていた。今回、はじめて見る男が大半だ。

「勝負は、この五十メートルプールを、この十一人がリレーで泳ぎ切る間に、亜由美は一往復、つまり百メートル泳ぐことです」

震えが止まらないが、単純に勝てそ

うな勝負だと亜由美は思った。

体格からして、水泳の経験のある者ばかりだ。男たちは早いだろう。

しかし十一人がリレーするのである。五百五十メートルも泳ぐのだ。その間に、亜由美が百メートルを泳ぐのは簡単なことだ。

まさか、この手枷、足枷と鉄球をつけたままプールに放り込むわけではないだろう。

「もし亜由美が男たちより早ければ勝ち。負ければ、輪姦タイム。この男達全員に三時間、犯され続けることになっちゃいます」

三時間も……。

カラオケ店のことを思い浮かべて
しまう。人数はあのときのほうが多か
ったが……。

今回は勝負が連続する。そのたびに
対戦相手はフレッシュな男たちに入れ
替わるのだ。

亜由美はそれに一人だけで立ち向
かうのである、最初の勝負で負けたら、
そのダメージのまま次の勝負に挑ま
なければならない。

負ければ大きなハンデを背負う。そ
れだけ負け続ける可能性が高くなる。
それは、そのまま拷問への道となって
しまう。

「枷を外してくださーい」

男たちがきて、亜由美から手枷、足枷、重い鎖、鉄球を取り除く。

手首と足首はすりむけて赤くなっていた。

「このルールだと、亜由美が簡単に勝てそうですから、亜由美にハンデをつけましょう」

ゲー研の男が、ビート板を持って来た。ビート板が使えればもっと楽ではないか。

そのビート板には細い鎖がついていて、先端にクリップが取り付けられている。

「それを、敏感すぎるクリちゃんに装着してください」

「ええ！」

羽交い締めになれ、股間を剥き出しにされる。

ギザギザの歯がついたクリップがグイッと押しつけられた。

「ううう」

包皮を含めて強力なバネの力ではさみつける。

「いいいいいい」

痛いという言葉にさえならない。全身が麻痺したような痛みだ。

震えも止まらない。寒さのせいだけではない。

恐ろしかった。

お読みいただき

ありがとうございました。

2012年5月刊行

著作権 2012年 あんぷらぐど

荒縄工房の情報は下記サイトへ

ブログ「荒縄工房」

ホームページ「荒縄工房」

SM研究室

荒縄 淫美

刊行作品情報は DLSite のページへ